

No. 2

No. 1

文字を書かない文通

柏市立光ヶ丘中学校

三年

廣瀬

美紀

行ってますよ。

私は重いうラケットバックリを背負い、学校へと

向かっている。その日は約二年半続けてきた

部活の、最後の一日練習の日だ。そして

最後の部活弁当の日。でもあった。

その日のお弁当は、おにぎり二つとおかず

が少し。いつもと変わらない組み合わせだ。

た。お母さんは部活の弁当と言うと、決まっ

てこのスタイルの弁当を作ってくれていた。

今はこのおにぎり二つとおかずが少しと

うスタイルを気に入っているものの、まだ部

活に入ってまもなく、たあのころは、このス

タイルが嫌で嫌でたまらなかった。

他の子はサニドイ千やおしゃいなおに

りなど、はいいくておいしそうなお弁当だ

。たのに、私は中に梅干しが入っただけの地

味なおにぎり。それがただひたすら恥づかし

か。たのだ。そして、

No. 4

No. 3

っ なんと あんな地味な弁当を作るのレ。
 とお母さんに怒鳴ってしまった。後悔先立た
 ず。それから母は弁当を作ってくれなくな
 た。しかたなく私は、ずとユニビニのパン
 を買って食べていた。
 すると、何日か経ったある大会の日の朝、
 起きるとひさしばかりに弁当を作る母の姿があ
 った。驚いてしばらく立ち尽していると
 「運動していろのニコニコのパンなんてあ
 りえない。あんたは見た目で判断してるけ
 んだからレ。
 と言った。そのとき、私は感謝と罪悪感
 で涙があふいて止まらなかつた。こころで考
 えてこのおにぎりを作ってくれていた。なの
 に私は、そう思うと、見映えだけを気にして
 お母さんを傷つけてしまつた自分に腹が立
 った。そんなひどいことを私はしてしまつたの
 に、今、母は忙しくて応援に行けな半分前

No. 6

No. 5

のようにおにぎりで私の体をサポートしよう
 としてくいていた。
 今改めて考えてみると、このおにぎりじや
 なければここまで部活を続けられなかったか
 もしれないうどんなときも、このおにぎりほ
 思ひ出のワンシーンに登場してくる。悔し涙
 を流した日、みんなで抱き合って喜んだ日、
 雨の日、暑かった日、寒かった日。過酷な練
 習を乗り越えられたのも、あのおにぎりの目
 には見えないうち栄養素達が私の体を支えてく
 くれたから。そして、たくさん込められたお母さ
 んのパワーをもらっていったから。まろで、あ
 母さんの分身かのようにそばにいてくれた。
 だけれどそれだけじゃなかった。もちろんあ
 のおにぎりは不器用で気持ちや伝えろのが下
 手くそな母からの精一杯のエールだった。逆
 に、反抗期で照れくさい私からもうッアを
 きいれたんだ。キッチンに置いておくこと
 が、精一杯の感謝の表れ方だった。このやり
 とりは、お互いに意地っばりで素直になれな

No. 7

No. 8

母と子同士の文字を書かない文通だ。た。
 あのおにぎりがないければ部活を続けられてい
 なかつたかもしれないという以前に、母子の
 コミニティーを保持上でのかけがえの
 ない存在だ。た。
 部活を引退してから早くも半月が過ぎた今、
 あ部活弁当は受験弁当へと変えられた。今
 年の夏から塾に行き始めた私にと、慣れ
 ない中でたくさん課題をこなすのは大変だ
 ころの問題ではなかった。その分ストレスで
 母にやつたりしてしまつたこともある。だ
 けど、今は母も大変さを受け入れて、私の怒
 りが収まるまでつき合ってくれる。そして、
 塾のお弁当もかかず作ってくれる。
 あのおにぎりは相変わらずで、塾でも
 梅でしゃべいね。た。
 て少し笑われる。だけど今は、胸を張って
 私に梅が好きなんだ。た。
 ては、きり言える。あのおにぎりは、お母
 さんと私を少し変えてくれたような気がする。